



角 笛 会 会 報

発行所
日本大学生物資源科学部
獣医学科角笛会
〒252-0813
藤沢市亀井野 1 8 6 6
0466-84-3644



改革される校友会費について

会長 日比野 次郎

これまで大学の支援により校友会も存在してまいりましたが、大学が厳しい競争原理に立って存立をかけるように校友会も自助自立を図るべく、校友会の組織が変更されました。この度、角笛会会員各位にも校友会本部から直接通知が送られてきて驚かれたことと思います。

新たな校友会についてはまだ校友に十分理解できないところもあると思いますが、ここで内容を簡単に説明しておきたいと思ひます。また、今後は機会あるごとに「コミュニケーション」を計り、角笛会の親睦を計り、本部（学部校友会）の方針が明瞭になれば一日も早く角笛会の組織改革を行ってゆかなければならぬと思っております。

■獣医学教育の充実と国際化■

獣医学科主任 渡部 敏

会員の皆様方にはご清邁のことと存じます。

現在、国立獣医学系大学においては平成14年6月の閣議決定に従って「国立大学の法人化・非公務員化」が16年度を目途に推進されています。法人化・非公務員化するに当たっては、獣医学教育の充実と国際化を前提とした国立大学の再編・統合による学部および大学院大学を設置しなければなりません。

平成9年2月、獣医学教育の充実と国際化に先駆けて大学基準協会は「獣医学教育に関する基準」を改定しました。その基準によれば獣医学教育および研究は「獣医学部」あるいはこれに相当する学部組織により実施し、付属施設としては「獣医学教育病院」、「獣医臨床センター」および「先端動物研究センター」などを設置する必要があります。更に「公衆衛生臨床研修センター」、「野生動物臨床研修センター」、「毒性安全性研修センター」および「獣医熱帯病臨床研修センター」などから何れか一施設を選択して設置することが上げられています。平成12年3月、日本学術会議獣医学研究連絡委員会は「わが国の獣医学教育の抜本的改革に関する提言」として、獣医学教育および研究は「獣医学部」において行うものとし、社会の要請に対応した獣医学教育を国際的水準に到達させるために抜本的改革を行う必要があることを提言しています。平成13年4月、全国大学獣医関係代表者協議会会長（唐木英明 東京大学教授）から、「獣医学教育基準の達成に関する要望書（通知）」が各関係大学学長、総長宛に送付

決定した事項

日本大学卒業校友	年会費8,000円
内訳 (A)日本大学本部校友会	5,600円
(B)日本大学学部校友会	2,400円
計	8,000円

上記 (B) 2,400円を学部本部と学科毎にいかなる方針で分配するかは、これから学部校友会の幹事会で早急に決定実施せねばならぬことです。学科毎に平等に分配することは、第一条件かと思いますが、本学部では獣医学科のみが6年制ですので、その点十分考慮して頂く様、小生も申し立てをいたします。

学生は準会員として年間10,000円を徴収致します（平成15年以降に入学した学生より）。

- | | |
|-------------|--------|
| ①日本大学校友会本部へ | 2,000円 |
| ②生物資源科学部へ | 2,000円 |
| ③学部校友会へ | 6,000円 |

されました。その中で「各私立大学が建学の精神にそって獣医学部教育の整備充実に向けて一層努力することを要望する」と述べています。この要望書は先の日本学術会議の提言と同様に獣医学教育および研究は云うまでもなく「学部教育」であり、その整備および充実を促しています。

国立獣医学系大学の再編整備、法人化は目前に迫っています。それに伴って私立獣医学系大学における獣医学教育の充実と国際化は必定の状況にあります。本年、同僚校である日本獣医畜産大学は獣医畜産学部獣医学科を獣医学部に改組しました（平成14年7月、文部科学省認可）。以上のような状況から本学においても学部当局を始め校友諸公と獣医学科教員が一丸となってこの困難な局面を打開しなければなりません。重ねてご協力の程お願い申し上げます。

■平成14年度角笛会総会を開催■

事務局 鎌田 寛

角笛会総会が、7月6日土曜日に藤沢校舎で開催されました。今年は例年に勝る猛暑でしたが、その暑い天候にも関わらず、約百名の会員が全国より10号館第4講義室に参集致しました。日比野次郎会長（S15卒）の挨拶の後、清水太郎氏（神奈川:S27）が議長選任を受けました。先年度事業報告、同会計報告及び監査報告（監事小暮規夫：東



③の学部校友会の6,000円を各分会にいか分配するかは現在未定です。

以上の事項を学部校友会本部で早急に決定し、各学科の事情に合わせて今後の運営をしていかなければならぬと思ひます。

獣医学科においても各県の支部運営が、今後異なってくることであり、今までいたっている会費の徴収の件についても再検討しなければならぬと思ひます。

角笛会本部としても、早急に原案を作り、今後の角笛会の運営を計りたいと思ひますので、何とぞご協力くださいますようお願い申し上げます。

なお、本部会費の納入は下記宛にお振り込みくださいますようお願い申し上げます。

郵便振り込み

日本大学校友会
口座番号 00170-4-123916
会 費 8,000円

(問い合わせ先)

日本大学校友会本部事務局
〒102-8275 東京都千代田区九段南4-8-24
TEL 03-5275-9300 FAX 03-5275-8330

京S24、堀口隆嘉：東京S33、福田陽一：東京S36（敬称略）を承認後、本年度事業計画、予算案が認められました。昨年度は例年と同様、およそ30回に亘って各支部、同僚校友会に大学側、角笛会本部から出張を行いました。会長自ら卒業生の一人々々に記念品のネクタイピンやペンダントヘッドを配り、門出を祝いました。

本年度の新たなANMEC支援基金授与候補には、中川秀樹委員長（神奈川:S40）の下に検討の結果、宮崎良雄君（H10岩大卒：ANMEC研修医）提出の「特殊血液検査の小動物臨床への適応について」に決しました。また茨城県新支部長飯塚達人氏（S34）が常任幹事に補せられました。満場一致で閉会の後、平成14年度角笛会功労者表彰式に移り、川本紀夫（岐阜:S16）、影浦義博（愛媛:S16）、西岡定雄（京都:S23）、石川栄二、米倉忠夫（各神奈川:S24）、屋富祖幸（神奈川:S37）の六氏に、永年の角笛会への貢献を讃へ、会長より表彰状と記念品とが授与されました。

午後4時より新本館棟地下に開店しているスエヒロ・カフェテリアで懇親会が開催され、殆どの出席者の参加を得ました。各学科の校友会代表を来賓として迎え、学科教員も交える中、冒頭、獣医学科主任渡辺敏教授（神奈川:S37）より来賓、校友に御挨拶を戴いて後、拓友会新会長内田俊太郎氏の音頭で杯を挙げると、相互に親しく歓談の時を迎えました。約二時間を経て、小池専治氏（岩手:S28）が閉会の辞を述べられ、楽しい饗会となりました。

総会資料

平成13年度一般会計収支決算報告書

自 平成13年4月1日 至 平成14年3月31日

収入の部

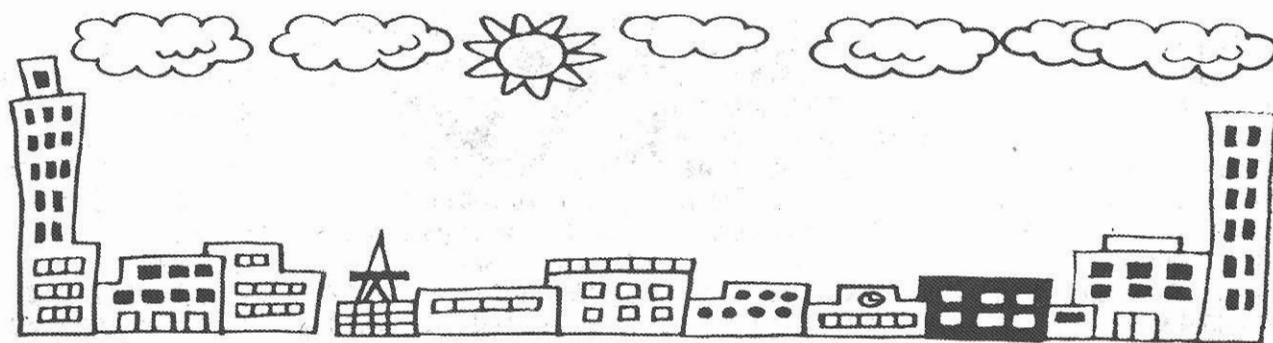
(円)

科 目	予算額	決算額	差 額	備 考
I. 支部会員費	1,200,000	1,195,000	△ 5,000	1195人分
今年度分	1,000,000	812,000	△ 188,000	
過年度分	200,000	383,000	183,000	
II. 終身会員費	1,300,000	575,000	△ 725,000	29人分
III. 新入会員費	1,500,000	1,370,000	△ 130,000	学部後援会137名分
IV. 学部校友会交付金	200,000	200,000	0	学部より
V. 懇親会参加費	250,000	275,000	25,000	H13総会関係
VI. 寄付金	0	0	0	
VII. 預金利子	3,485	686	△ 2,799	
VIII. その他	0	34,125	34,125	記念品代
当期収入合計(A)	4,453,485	3,649,811	△ 803,674	
前期繰り越し額	3,549,515	3,549,515	0	H13総会決議より
収入合計(B)	8,003,000	7,199,326	△ 803,674	

支出の部

(円)

科 目	予算額	決算額	差 額	備 考
I. 経常費	4,750,000	2,885,943	1,864,057	
1. 会合費	1,000,000	449,060	550,940	懇親会、会議等
2. 交際費	700,000	249,132	450,868	支部総会等祝い金
3. 旅費交通費	1,000,000	930,600	69,400	支部総会等旅費
4. 通信運搬費	500,000	122,484	377,516	通信
5. 事務局運営費	1,550,000	1,134,667	415,333	給与、ソフト等
II. 会報費	800,000	514,500	285,500	会報17号
III. 名簿作成繰入金	300,000	0	300,000	
IV. 名簿管理費	300,000	0	300,000	
V. 卒業生記念品費	500,000	238,350	261,650	平成13年度卒業生
VI. 学会補助費	200,000	200,000	0	第39回日大獣医学会
VII. 将来事業基金	300,000	0	300,000	
VIII. 組織拡充費	470,000	0	470,000	
IX. 予備費	383,000	0	383,000	
X. 郵便振替手数料	0	480	△ 480	
当期支出合計(C)	8,003,000	3,839,273	4,163,727	
当期収支差額(A-C)	△ 3,549,515	△ 189,462	△ 3,360,053	三菱銀行
次期繰越収支差額(B-C)	0	3,360,053	△ 3,360,053	



平成14年度一般会計 予算(案)

自 平成 14 年 4 月 1 日 至 平成 15 年 3 月 31 日

収入の部

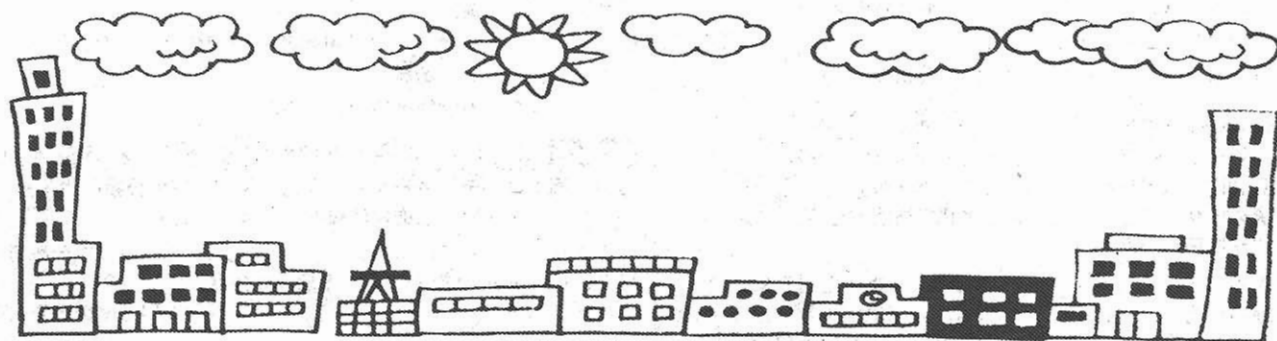
(円)

科 目	予 算 額	前年度予算額	差 額	備 考
I. 支部会員費	1,200,000	1,200,000	0	1200名@1,000円
今年度分	1,000,000	1,000,000	0	
過年度分	200,000	200,000	0	
II. 終身会員費	1,200,000	1,300,000	△ 100,000	60名@20,000円
III. 新入会員費	1,400,000	1,500,000	△ 100,000	学部後援会
IV. 学部校友会交付金	200,000	200,000	0	学部より
V. 懇親会参加費	280,000	250,000	30,000	56名@5,000円
VI. 寄付金	0	0	0	
VII. 預金利子	4,947	3,485	1,462	
VIII. その他	0	0	0	
当期収入合計(A)	4,284,947	4,453,485	△ 168,538	
前期繰り越し額	3,360,053	3,549,515	△ 189,462	
収入合計(B)	7,645,000	8,003,000	△ 358,000	

支出の部

(円)

科 目	予 算 額	前年度予算額	差 額	備 考
I. 経常費	4,660,000	4,750,000	△ 90,000	
1. 会合費	1,000,000	1,000,000	0	懇親会、会議等
2. 交際費	700,000	700,000	0	支部総会等祝い金
3. 旅費交通費	1,000,000	1,000,000	0	支部総会等旅費
4. 通信運搬費	500,000	500,000	0	通信
5. 事務局運営費	1,460,000	1,550,000	△ 90,000	給与、ソフト等
II. 会報費	800,000	800,000	0	会報18号
III. 名簿作成繰入金	300,000	300,000	0	特別会計Ⅰへ
IV. 名簿管理費	300,000	300,000	0	業務委託等
V. 卒業生記念品費	500,000	500,000	0	平成14年度卒業生
VI. 学会補助費	200,000	200,000	0	第39回日大獣医学会
VII. 将来事業繰入金	300,000	300,000	0	特別会計Ⅱへ
VIII. 組織拡充費	300,000	470,000	△ 170,000	情報ネット化調査費
予備費	285,000	383,000	△ 98,000	
当期支出合計(C)	7,645,000	8,003,000	△ 358,000	
当期収支差額(A-C)	△ 3,360,053	△ 3,549,515	189,462	
次期繰越収支差額(B-C)	0	0	0	



ANMEC関連記事

平成13年度ANMECセミナー実施概要

診療部長 津曲 茂久

ANMEC開設当時から続けてきた症例報告2題と教育講演1題というスタイルを、前年度より臓器別疾患シリーズと検査マニュアルシリーズに変更している。これは参加者の多くが学生であることから参加者全員の理解を容易にするために実施している。さらに、授業では実現していない臓器別疾患シリーズのような新しい教育体制を一度試行しておく必要があると考えたからである。お陰様で学科内の基礎、応用の先生方のご理解も得られ、順調に回を重ねている。従来のセミナーでは、一つのテーマに対して一人の教員が講演してきたが、臓器別疾患シリーズでは解剖、生理、病理、臨床の教員が一つのテーマに対して系統立てて講演してもらっている。丁度、商業

雑誌の特集記事に類似したスタイルを想像していただければご理解頂けるであろう。この最大のメリットは参加者の理解が得られやすいことであるが、デメリットは教員の負担が時間的にも回数的にも増加することである。しかしながら、これからの獣医学教育の国際化を志向する際に必ず通らなければならない課題である。今年からはマニュアルシリーズに代わり感染症シリーズが新設され、学生にも好評のようである。

ANMECセミナーを運営している立場から多少率直な感想を述べさせて頂きたい。アメリカの大学に滞在していた時に強く印象に残ったことは、アメリカの大学では各種セミナーが毎週実施されており、大学に居ながら

にして最先端の学術情報を享受できたことである。この情報量の差が日米の大学、獣医界のレベル格差になるとの感慨を持ったが、毎月実施しているANMECセミナーも大学からの情報発信としての役割を果たすことを目的としており、折角情報の機会が多くなってもそれを活かす受け手が少ないとその成果は上がらないのは自明である。是非一度セミナーへのご参加をお願い致します。セミナーの内容についてご意見がありましたら動物病院、角笛会事務局までご連絡ください。今年度から、地方会員のご要望を受けて毎回のセミナー要旨を角笛会のホームページに掲載する予定である。

平成13年度 ANMECセミナー (第66回～第76回)

第66回 (H13.4.16開催):参加者164名(外部:8名・内部:156名)

教育講演:コーディネーター:亘 敏広(総合臨床獣医学)

第8回 臓器別疾患シリーズ:
消化器 特集「慢性胃炎・十二指腸炎」

1. 胃、十二指腸の構造
マクロの形態、および組織学的構造
木村順平(獣医解剖学)
2. 胃、十二指腸の機能
胃液、十二指腸の分泌と嘔吐のメカニズム
大谷 功(獣医生理学)
3. 慢性胃・十二指腸炎の病態と病理像
佐藤常男(獣医病理学)
4. 慢性胃・十二指腸炎の診断および治療の実践
亘 敏広(総合臨床獣医学)

第67回 (H13.5.21開催):参加者157名(外部:5名・内部:152名)

症例報告:①山内 理恵:無菌性皮下脂肪炎の犬の3例
②阿部 葉子:犬の副腎皮質機能低下症の2例

教育講演:第9回 マニュアルシリーズ
中村 遊香:皮膚科の検査

第68回 (H13.6.18開催):参加者139名(外部:8名・内部:131名)

教育講演:コーディネーター:津曲 茂久(獣医臨床繁殖学)
第9回 臓器別疾患シリーズ:雌の生殖器疾患

1. 犬の雌生殖器の形態 木村順平(獣医解剖学)
2. 犬の生殖生理 大谷 功(獣医生理学)
3. 卵巣・子宮疾患の病理 佐藤常男(獣医病理学)
4. 犬の繁殖と生殖器疾患の臨床 津曲茂久(獣医臨床繁殖学)

第69回 (H13.7.23開催):参加者91名(外部:14名・内部:77名)

症例短報:①村松 真人:腹腔鏡下肝生検にデスマプレシンを
応用した肝硬変の犬の1例

②宮崎 良雄:猫の免疫介在性溶血性貧血の1例

教育講演:第10回 マニュアルシリーズ
亘 敏広(総合臨床獣医学):内視鏡検査

第70回 (H13.9.17開催):参加者128名(外部:6名・内部:122名)

教育講演:コーディネーター:亘 敏広(総合臨床獣医学)
第10回 臓器別疾患シリーズ:「甲状腺」
犬の甲状腺機能低下症、猫の甲状腺機能亢進症、
甲状腺腫瘍など。

1. 甲状腺の形態 木村順平(獣医解剖学)
2. 甲状腺の機能 大谷 功(獣医生理学)
3. 甲状腺疾患の病理 佐藤常男(獣医病理学)

4. 甲状腺機能低下症、機能亢進症の臨床

亘 敏広(総合臨床獣医学)

第71回 (H13.10.15開催):参加者95名(外部:7名・内部:88名)

教育講演:コーディネーター:中村遊香(獣医内科学)

第1回 感染病防御シリーズ:「犬のウイルス感染症」

1. 犬のウイルス感染症とワクチネーション
上床和弘(獣医伝染病学)
2. 病院内での衛生対策 伊藤琢也(獣医衛生学)

第72回 (H13.11.5):参加者198名(外部:10名・内部:188名)

教育講演:特別講演

Dr. Bagley 教授(ワシントン州立大学・神経外科):
小動物神経疾患に関するトピックス

第73回 (H13.12.17開催):参加者95名(外部:7名・内部:88名)

教育講演:コーディネーター:亘 敏広(総合臨床獣医学)

第2回 感染病防御シリーズ:「猫の上部気道感染症」

1. 猫のヘルペスウイルス、カリシウイルス感染症など
見上 彪(獣医公衆衛生学)
2. 猫の真菌感染症(クリプトコッカス症など)
加納 星(獣医臨床病理学)

第74回 (H14.1.16開催):参加者81名(外部:3名・内部:78名)

教育講演:コーディネーター:北川 勝人

第11回 臓器別疾患シリーズ:「脳疾患」

1. 脳の臨床解剖と生理 北川 勝人
2. 症例(脳炎3症例)
臨症診断 北川 勝人
画像診断 桑原 正人(獣医放射線学)
病理組織診断 佐藤 常男(獣医病理学)

第75回 (H14.2.12開催):参加者105名(外部:47名・内部:58名)

教育講演:特別講演

Dr. Robert J. Washabau 助教授(ペンシルバニア大学)

1. 難治性嘔吐の診断
2. 猫における慢性下痢の鑑別診断

第76回 (H14.3.18開催):参加者48名(外部:7名・内部:41名)

教育講演:コーディネーター:丸山 総一(獣医公衆衛生学)

第3回 感染病防御シリーズ:「人畜共通感染症」

1. ペットからうつる病気 丸山 総一(獣医公衆衛生学)
2. Bartonella感染症に関する最近の知見
壁谷 英則(獣医公衆衛生学)

ANMEC関連記事

平成12年度
ANMEC助成金受賞者報告犬尿中レプトスピラの
検出について日本大学生物資源科学部獣医臨床病理学研究室
加納 星

レプトスピラ(Lp)が生体内に侵入し、血中で増殖、肝、腎、肺など各種臓器に障害を惹起する。その後生体が抗体を産生すると、Lpは抗体の影響の及び難い部位に存在するようになる。特に腎尿管に潜むようになると、長期にわたり尿中に排菌され感染源となるため排菌動物を確定して処置することは、犬で

の感染のみならず公衆衛生上も重要である。そこで、尿中から排出される本菌の存在を確認するためPCR法によってLpの遺伝子を検出する方法を検討した。

まずLpのヘモリジン遺伝子の特異的に増幅するプライマーを設計した。次に、*Leptospira interrogans* のRGA, UTIV, Akiyami Aの3株の遺伝子および陰性対照として犬尿路感染症由来の各種細菌株の遺伝子をそれぞれ抽出し、設計したプライマーを用いてNested PCRを行った。増幅された遺伝子断片を電気泳動し、エチジウムブロマイド染色後、紫外線照射下で観察した。さらに検出感度を調べるために、尿中または生理食塩水を用いて3株の希釈系列を作製し、1ml中の検出可能な菌数をNested PCRを行って検討した。

検討した3株のDNAからはそれぞれ目的の

長さの約900bpのバンドが確認されたが、他の細菌および犬の遺伝子を混入させた溶液からは目的の遺伝子が増幅されなかった。また犬の尿中および生理食塩水中に混入した3株においては10菌数/mlで遺伝子が検出可能であった。

以上の結果から、PCR法による尿中Lpの検出は、特異性および感度が充分であると考えられた。また従来検出法に比べて本法は、短時間にしかも直接菌の遺伝子を検出するため確実であるうえに、抗生剤治療後のなど培養不可能な場合にも検出できるという長所があると思われる。現在、犬のレプトスピラ感染が疑われる症例からの尿について、本法の有用性を検討している。

学部・学科関連記事

平成14年度 獣医学科入試状況

平成14年度獣医学科の入試状況は、A方式(本校)試験が受験者数2,642名・合格者数105名で倍率22.9倍、B方式(地方)試験が受験者数680名・合格者数25名で倍率27.0倍となりました。昨年に比べて本校試験の倍率は減少し、地方試験の倍率が増加しました(表参照)。

選抜方法	募集人員	受験者数	合格者数	競争率
指定校推薦(普通科)	学部全体で110名	26(19)	12(9)	2.2
公募制推薦(普通科)	学部全体で55名	67(46)	9(7)	7.4
公募制推薦(関連産業後継者)	学部全体で44名	26(12)	8(6)	3.3
公募制(技能)	学部全体で22名	14(10)	2(1)	7.0
本校試験	50名	2,642(1,231)	105(63)	22.9
地方試験	10名	680(325)	25(8)	27.0

本年度獣医学科に入学した1年生は154名(うち女子は92名)です。

()は女子

待望の新本館棟完成

新本館棟講義棟が平成11年8月に着工し、29ヶ月を費やして平成13年12月に完成しました。

規模は地下1階地上16階、延床積は約26,400㎡の地下鉄骨鉄筋コンクリート造り・地上鉄骨造りです。建物は新本館棟を中心に北側にアトリウム棟、東側に講義棟、連絡通路の4ブロックから構成されています。新本館棟は地下1階が機械室、ガレリア階が食堂で学生教職員の憩いの場所と言えます。その周りは、サンクンガーデンと12号館へと続き、素晴らしい景観の庭が楽しめ心を和やかに癒してくれるでしょう。1階は事務室、2階は執行部と大会議室となっており、本学部の中核部です。3階から13階は各講義室と研究室になっています。最上階のNUホールは多目的ホールとしての機能を持ち、又展望が素晴らしく天気の良い日は、富士山、江ノ島、湘南海岸、横浜ランドマークなどが一望できます。北側に位置するアトリウムは全面ガラス貼りの4層が吹き抜けとなった明るく開放的な空間で学生や先生方の交流の場として、そして創造力を高め、ゆとりのある豊かな気持ちに

なれる場所として活用されるでしょう。東側に位置する講義棟はアプローチデッキ上に建てられ、空中の3階4階で新本館アトリウムと繋がっています。大講義は480名収容出来、近代的な音響設備が完備され各種講義や研究発表に利用されます。又それらの建物と12号館旧本館とは空中の連絡通路で結ばれ建物間の移動でも色々な雰囲気、景観が楽しめます。

最後に新本館棟の完成によりキャンパス整備計画は一段落しましたが、平成10年6月より3年7ヶ月と長い間学生・教職員の方々にはご理解とご協力をいただき、この紙面を借りてお礼申し上げます。

■ 本館内部紹介

生物資源科学部は念願であった東京キャンパスから湘南キャンパスへの移転事業が新本館棟完成(平成14年1月竣工)をもって平成14年3月完了しました。

4月9日の開講式から本格稼働したこの建物は、藤沢六会地区のランドマークタワーとして高くそびえ立つ近代建物です。また、水(井戸水)をふんだんに使ったサンクンガーデンは建物をより一層引き立てています。

この建物の特徴の一つとしてガレリア階(G階)があります。そこにはカフェテリアと憩

いの広場があり、カフェテリアには銀座スエヒロがステーキ定食を始めとする各種和洋食を提供しています。またラーメンコーナーも設置されており、食事時には長蛇の列ができるほどです。憩いの場所にはパソコンコーナーもあり、誰でも自由に使えるようになっていきます。

1階から4階まで吹き抜けたアトリウムは全面がガラスで覆われ、エスカレーターが装備されています。

1階は事務局のスペースとアトリウムになっていて、喫茶コーナーもあります。

3階から9階は講義室とコンピュータ教室で約200台のパソコンが設置されています。講義室の中には各自がパソコンを使用できるように対応してあります。

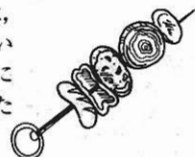
10階から13階には東京校舎から移転してきた2学科、食品経済学科と国際地域開発学科の研究室・演習室となっています。

14階部分はNUホールと称してレセプションホールになっています。ここからの眺めはすばらしく、晴れた日には江ノ島はもちろん大島までみることができ、右手に目をやれば雄大な富士山が眺望できます。

日本大学全体の中でも、最も高い建物で約75mの高さを誇っています。

新入生
歓迎会開催さる

平成14年4月27日(土)、AM9:30より湘南鵠沼海岸にて学科の恒例行事である獣医学科新入生歓迎会が開催されました。角笛会より日比野次郎会長をはじめ多数の学科教員また新入生の参加がえられました。当日は地引き網をした後、捕れた魚やたくさん肉、野菜でバーベキューを行い大盛況でした。新入生には角笛会より贈呈された特賞の自転車など様々な景品を用意し、クイズの過程で新入生同士の交流や親睦が深められたことと思います。またバーベキュー時においても先輩、後輩の垣根なく会話を交えたことは、入学3週間足らずでいるいろいろな不安を抱えた一年生にとって大きな助けになったことと思います。



獣医師国家試験

第53回獣医師国家試験の結果が平成14年3月19日に発表されました。日本大学獣医学科からは新卒者132人が受験し、122人が合格しました。合格率は92.4%で、全国平均の86.9%を大きく上回りました。また、昨年の合格率91.4%も上回る好成績を残しました。

表彰・学位の授与

【受賞】

卒業生の青木瑞穂さんが優等賞、大森啓太郎さんと栗飯原しのぶさんが学部長賞、石川朗さんが日本獣医師会会長賞をそれぞれ授与されました。

角笛会会長賞は、小熊圭祐君（獣医臨床病理学）、新村真海さん（獣医衛生学）に授与されました。

外科の助手・浅野和之先生が「平成14年度関東地区獣医師会連合会」で学術奨励賞受賞を受賞されました。

【褒章】

この度、元日本大学教授久保周一郎先生が勲二等瑞宝章を受章されました。この章は勲労のある男子または婦人に授与されるもので、久保先生の長年の研究ならびに獣医学における功勞により受章されました。獣医学科一同心よりお祝い申し上げます。

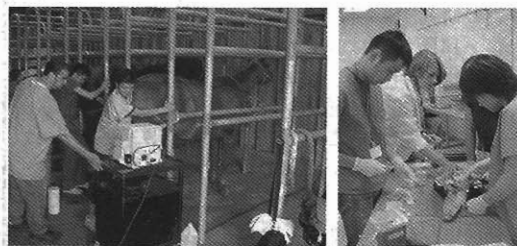
●受賞演題

犬の肝内性門脈体循環シャントに対するコイル塞栓術の治療効果について

○浅野和之、田中茂男（日大獣医外科）

平成 14 年度
ワシントン州立大学
夏季獣医臨床研修を終えて

昨今、教育のグローバル化が叫ばれていますが、獣医学もその例外ではありません。今回で12年目となる夏季獣医臨床研修が米国ワシントン州にあるWSU獣医学部にて、本年も開催されました。参加者は獣医学科5年次40名、6年次1名であり、7月20日～8月3日の間、ウマ医学コースと小動物医学コースに分かれて実施されました。実習内容は講義よりも実際に動物を使った実習が主体で、傷病鳥類の治療、ウマの消化器外科、イヌの神経病の診断など特に米国においてより進んだ領域も含めて、少人数に分かれて討論を交え実施されました。臨床獣医学は世界的にも米国で優れた教育がなされていると云われていますが、充実した施設設備、学生の学習意欲の高さ、充実した臨床教育などを体験し、また、実習の合間には、教職員や学生との交流も盛ん



I. はじめに

門脈体循環シャント(PSS)は発生部位によって肝外性と肝内性に大別されるが、肝外性と比較して肝内性の場合には外科的結紮術が技術的に困難であり、術中・術後の合併症の発生率や死亡率が高い。したがって、より安全で低侵襲な治療法の確立が望まれている。

すでに動脈管閉存症の治療に応用されているコイル塞栓術は、肝内性PSSにおいてもシャント血管の閉塞に有効であろうと考えられているものの、複数の症例を基にその治療効果を検討した報告は見当たらない。

今回、肝内性PSSの犬4症例に対してコイル塞栓術を行ったので、その概要を報告する。

II. 症 例

症例1はミニチュア・ダックスフンド、雌、3ヵ月齢で、体重は3.1kgであった。各種検査により、左肝区域を走行する直径6mmの単一のシャント血管が確認された。

症例2はミニチュア・ダックスフンド、雄、11ヵ月齢で、体重は3.0kgであった。各種検査により、中央肝区域を走行して静脈瘤を形成するシャント血管が確認された。

症例3はバーニーズ・マウンテンドッグ、雄、10ヵ月齢で、体重は26.4kgであった。各種検査により、左肝区域を走行する直径13mmの単一のシャント血管が確認された。

症例4はニューファンドランド、雄、3歳齢で、体重は34.6kgであった。各種検査により、右肝区域を走行する直径16mmの単一のシャント血管が確認された。

III. 治療成績

1. コイル塞栓術による治療回数

治療回数は症例1、3および4では1回であるのに対し、症例2では3回であった。

2. コイルの適用本数

症例1では1本、症例2では合計4本、症例3および4では各々8本ずつ適用した。

3. 治療効果

症例1、2および3では臨床症状の改善が認められたのに対し、症例4では特に臨床症状に変化はみられなかった。症例1および3は内科療法と食餌管理から離脱でき、症例2および4においても内科療法を軽減することが可能であった。

に行われ、朝から晩まで、心地よい刺激の連続で『エンジン全開状態』になっていたのは、学生のみならず、引率教職員も同様です。個々の人生観に大きな変革をもたらせ全員無事帰国しました。当地で見せてくれた学生諸君の輝く瞳、明るい笑顔をこの藤沢キャンパスでも見受けると嬉しくなります。秋にはWSUの教員が本学部にて授業、実習を行います。ボーダーレスな教育の幕開けです。

（引率教職員：田中茂男、木村順平、
渋谷久、大久保かず美）

（獣医学科 木村順平）

4. 完全閉塞の有無

症例1および3では1回のコイル塞栓術によってシャント血管の完全閉塞が得られた。症例2では3回のコイル塞栓術後においても完全閉塞は得られなかった。症例4においても1回のコイル塞栓術後では完全閉塞が得られておらず、再度2回目のコイル塞栓術を予定している。

IV. 考 察

今回、肝内性PSSに罹患した小型犬2頭および大型犬2頭に対し、コイル塞栓術による治療を行い、臨床症状の改善や内科療法の軽減が可能となり、良好な治療成績が得られた。

小型犬種において、静脈瘤形成や極端にシャント血管径が大きい場合以外は1本のコイルで高い塞栓効果が得られ、小型犬種におけるコイル塞栓術の臨床的有用性は高いと考えられた。一方、大型犬種ではシャント血管径が大きいこと、適用するコイルの本数が多く、1回では完全閉塞に至らない可能性が高くなると思われた。

左肝区域を走行するようなシャント血管はコイル塞栓術を適用しやすく、治療効果が高いと考えられるが、中央肝区域や右肝区域を走行するシャント血管はアプローチが比較的難しいことがあり、コイル塞栓術の施行が困難な場合に遭遇する可能性が考えられた。

また、門脈造影だけでなく、MRA、経胃エコー図法、DSAなどの画像診断技術を応用することにより、さらにコイル塞栓術の適用が容易になり、治療成績が向上することが示唆された。

【学位取得者】

今年度、学位を取得された方達は以下のとおりです。

<課程博士>

市川 康明 氏：犬のマイクロサテライト多型に関する研究

伊藤美佳子 氏：狂犬病ウィルスの分子疫学的研究

深井 克彦 氏：ウシA群ロタウィルスの分子疫学的研究

<論文博士>

鯉江 洋 氏：心エコーによる犬と猫の先天性疾患

小西 和世 氏：イヌおよびネコの尿路由来大腸菌の病原性に関する研究

平成 14 年度獣医学科担任

1 年次：湯川 真嘉 教授（実験動物学）

根本洋明助 教授（数学）

大場 茂夫 講師（獣医内科学）

2 年次：浅野 隆司 教授（獣医薬理学）

渋谷 久 講師（獣医病理学）

3 年次：金山 喜一 教授（獣医生理学）

上床 和弘 講師（獣医伝染病学）

4 年次：月瀬 東 教授（獣医解剖学）

森友 忠昭 助教授（魚病学）

5 年次：中西 照幸 教授（魚病学）

丸山 総一 助教授（獣医公衆衛生学）

6 年次：田中 茂男 教授（獣医外科学）

鎌田 寛助 教授（獣医微生物学）

教員の動き

●退職

吉田仁夫先生(獣医内科学)
竹内 啓先生(総合臨床獣医学)
高木 香先生(獣医臨床繁殖学)
貝瀬由美子さん(副手)
が退職されました。

●昇格・移動

伊藤琢也先生(獣医衛生学)
鯉江 洋先生(総合臨床獣医学)
が講師に昇格されました。

●新任

佐々木榮英教授
(獣医内科学)



昭和35年岐阜大学卒後、静岡県家畜衛生所・静岡県家畜衛生研究所勤務を経て、昭和55年に岐阜大学獣医内科学講座に勤務。平成13年3月岐阜大学を定年退職。岐阜大学では主として「犬糸状虫症」「黒毛和種牛における尿管管形成不全症(クローデン16欠損症)」に関する研究を行う。

徳力幹彦教授
(総合臨床獣医学)



昭和46年に東大農学部の大大学院を出て10年間獣医学科の助手を勤め、21年間、山口大

学で助教授、教授を勤めて、この4月から日大に赴任しました。基礎から臨床に変わりましたが、仕事が神経生理学なので、東大時代から神経疾患の診断だけはお手伝いをしており、この分野の発展の一助になればと願っています。

佐藤雪太助手
(実験動物学)



略歴

平成5年 北海道大学 獣医学部卒業
平成6年 旭川医科大学助手
平成10年 博士(獣医学)取得(北海道大学)
平成10年 国際協力事業団(JICA)職員
平成12年 秋田県立大学流動研究員
平成14年 現在に至る

日暮美紀副手
(獣医第二内科学研究室)



平成14年3月、本学部の動物資源科学科を卒業、同年4月、獣医学科副手

本年度は以上の4名が
採用されました。



武石昌敬教授のご逝去を偲んで

助教授 津曲茂久

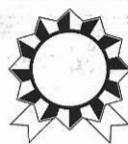
武石先生は日本大学板橋病院で御療養中のところ、平成14年10月5日午前2時に肝臓癌のため、ご逝去されました(享年68歳)。ここに謹んでご冥福をお祈りするとともに、先生の足跡を偲んで若干記させていただきます。

武石先生は日本大学大学院修士課程修了後直ちに昭和33年、獣医臨床繁殖学研究室の助手に就任され、その後昭和37年専任講師、昭和46年助教授、昭和58年には教授に昇格されています。その後大学院専攻主任、獣医学科主任および家畜病院長として重責を担われました。研究面においては多数の学術論文を公表され、研究費の十分でなかった時代から10人以上の学位論文を指導されました。学位を取得された方がその後社会的に活躍されていることを授業の中でもよく学生に話されていました。武石先生は教育面においても多大な足跡を残されました。学園紛争時代に始まった3泊4日の学外実習は国家試験対策の意義も加わり、その後20年以上続きました。毎年1班20人前後の学生実習を引き受ける獣医師の先生の苦労は並大抵ではなかったと想像されますが、多くの受け入れ先は武石先生が学位指導された関係者でした。北海道中標津で始まった牧場実習も現在まで30年以上続いております。1ヵ月間農家に泊り込み1日12

時間以上働いて、取得できる単位は1単位ですが、代え難い有意義な体験であったと卒業生の語り草になっております。その牧場実習が縁で、北海道の共済組合に就職した卒業生も周辺に多数おります。現在、全ての私立獣医科大学で実施されている海外研修は日本大学が最も長い歴史を持っておりますが、これも武石先生が先鞭を付けられました。カリフォルニア大学デービス校で始めた講義中心の研修セミナーがそもそもの発端ですが、その折、すぐさま姉妹校であるワシントン州立大学にも赴かれました。交渉の末、次年度からはワシントン州立大学でもセミナーを実施することになりました。デービス校とは異なり実習中心の研修としては格安であったことから3年目からはデービス校は止めて、ワシントン州立大学単独で2週間実施する現在のスタイルが確立しました。恐らく、15年間における参加学生数は400人以上になると思われます。

武石先生は良い教育は現場にあるとの考えのもとに、数十年前から身を挺して実践された稀有な教育者でした。これから獣医学教育の国際化に向けて益々時代の先取りが要求される矢先に、鬼籍に入られた武石先生の精神を今後は後輩として私どもが引き継いで行きたいと思っております。合掌。

角笛会関連記事

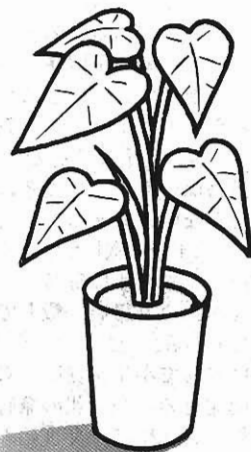
小暮規夫先生
イグノーベル賞受賞

この度、携帯電話向け情報サービスの株式会社インデックスと日本音響研究所、玩具メーカーの株式会社タカラ、および本学獣医学科卒業で小暮動物病院院長、小暮規夫先生が共同で開発した「パウリングル」が、米サイエンスユーモアマガジン『The Annals of Improbable Research』誌が主催する「イグノーベル賞」平和賞を受賞しました。

パウリングルは犬とのコミュニケーションツールで、本体とマイクで構成され、首輪に装着したワイヤレスマイクから泣き声を本体に転送、リアルタイム分析して翻訳する飼い主と犬のコミュニケーションツールです。自己表現、楽しい、悲しい、要求、威嚇、フラストレーションの6つの感情が分析できます。

イグノーベル賞は、ノーベル賞のパロディ版で、ユーモアと軽いノリを狙った賞です。「平和賞」は、人間と他の生物が平和に共存しているために貢献したものに与えられる賞で、パウリングルの受賞理由として、人の犬の共存のために貢献し、世界に通じるエンタテインメント商品を世に送り出したことが評価されたそうです。

授賞式は米ハーバード大学構内の Sanders Theatre で2002年10月3日に行われ、本物のノーベル化学賞受賞者、ウィリアム リブスコム博士から賞状とトロフィーが手渡されました。パウリングルのデモンストレーションは実際の犬も登場して行われました。



角笛会関連記事

土佐の酔人、酒とのコミュニケーションを求めて

竹崎 誠(昭和35年卒)

土佐流の酒は、酒のために酒を飲むといわれています。私は、これをコミュニケーションの為のコミュニケーションと呼んでいます。

日本大学卒業後の、高知県庁入庁当時(昭和35年より)は、無獣医地区の山間部での診療が行われており、農家の人から「若い先生の注射では牛は治らん、まず一杯の酒で清めてこそ治るぞ」と無理やりに嬉しい酒を飲まされる。

後でよくよく考えると、新米獣医先生が地域の人々との、コミュニケーションの機会を作って呉れる為の有難い酒であったと思っています。

私の最も尊敬し、高知県角笛会の生き字引で、会の発展に多大な貢献をされた大先輩で80歳を越えた今でも益々お元気な「繁山久寿先生」に、土佐流の酒の飲み方を叩き込まれ、私は今でもそれを忠実に守っております。

角笛会の貢献に対する表彰も、俺は絶対に受けんと頑張っています。これも、「土佐のいごっそう」という特有な面でもあります。酒にも一脈通じる処があります。

土佐の酒は、一般に辛口・淡麗で、飲み易

く私の同級生・若村恒吉君の娘さんで、かの有名な若村麻由美さんがモデルで宣伝している「土佐鶴」が有名ですが、これに合う酒の肴といえば、カツオのたたき

が正にぴったり。先人の作り上げた土佐の良き伝統文化で、絶妙のコンビなのでもあります。

北に良い酒ありと聴けば北へ行き、南に美酒在りと聴けば南へと向かう。

県外にも、幻の銘酒と謂われる酒も数多く、私の酒好きを知っている友人達は、それぞれの郷土自慢の銘酒を送ってくれる事もあります。

巷では、発泡酒やワイン・ウイスキーの水割り等が主流になっている様です。しかし長い歴史の中で続いてきた日本酒には、それなりの良さがあり、昨今では吟醸酒が好まれる様になって来ました。

口では、大きな事を一丁前に言っては居りますが、やはり寄る年波には勝てず、酒量は下降線を辿っています。

しかし、私の命に残っている間は、日本中でまだ口にしていない幻の銘酒を求めながら今後ともコミュニケーションを続けていきたいと思っています。

——土佐の高知のはりまや橋で

モンゴルを旅して(その一)

愛媛県角笛会支部長 平野 巧(昭和39年卒)

去年の夏、同期生の藤沢茂君に誘われてモンゴルを旅した。チンギス・ハーンが築いたモンゴル帝国、それを支えた騎馬文化を見たいためである。

そのなかでも日本の在来馬のルーツといわれるモンゴルの馬は野間馬(愛媛県今治市で飼養されている在来馬)の研究を始める前から一度は会ってみたいと考えていた。今回、モンゴルの文化・自然と親しむ旅を終えてモンゴルの人々について見たこと感じたことの一部をここに紹介したいと思う。

モンゴルでは7月の革命記念日に盛大なお祭り「ナードム」が国中をあげて行われる。そのナードムではモンゴル相撲、弓術、競馬の3種類の競技が競い合われる。その中でも30km以上も走り続け競い合う競馬は、モンゴル馬に興味のある私にとっても実際に見てみたい祭礼の一つである。そのような大規模のものではないが、祝い事や、記念行事として夏の間、何回も開催されているとのことであった。

私達一行のために、モンゴル獣医師会長の好意で距離の短い競馬、ミニナードムを開いて下さった。ナードムの競馬では騎乗するのは、6歳から12歳ぐらいの子供たちということである。ちょうど、愛媛県越智郡菊間町の御供馬の乗子の年齢と同じ位である。これは、馬の負担を軽

また、角笛会会員の中から埼玉県獣医師会の役員として、多くの方々にご活躍を戴いておりますとともに、多岐にわたりましてのご協力を戴いていることを感謝に込めてここに報告をさせていただきます。

こうした多くの会員の皆様とともに、私達がほこる角笛会会長であられる日比野先生には、身をもって母校を愛することの大切さについて、ご教示を戴いておりますことに深甚より敬意を表しますとともに感謝を申し上げたいと存じます。

近年、獣医師も国際化の中でより高度の学術をもって、その地位の向上と責任により、多くの分野での社会的貢献が求められてまいりました。

この様な中で、交友の絆を深めていくことは誠に重要で意義あることと認識を致しておりますところでございます。

一方、日本大学校友会も自主独立の精神に基づいて、大きな広がりを見せております。

埼玉県支部会におきましても、平成14年2月2日に日本大学総長 瀬在幸安先生並びに全国知事会会長埼玉県知事土屋義彦様をはじめ、多数の国会議員や県議会議員さらに日本大学関係者をご来賓としてお迎えし、平成13年度定期総会を開催致しました。

日本大学校友会の輪が一段と大きく全体に広がってきたことを出席者一同肌で感ずることができました。

私達もさらに、角笛会をとおして日本大学校友会に対しまして寄与してまいりたいと勤めてまいります。

むすびにあたり、角笛会の更なるご発展と会員、同窓の皆様のご健勝ご多幸を心より御祈念申し上げます。

支部会だより

東京支部

倉林恵太郎(昭和36年卒)

平成14年度の角笛会総会が平成14年7月6日(土曜日)、日本大学生物資源科学部湘南校舎10号館2階の第4講義室で開催された。

議案は、平成13年度事業報告・会計報告・監査報告、平成14年度事業計画・予算、功労者表彰候補者選出、追認役員などであった。

例年のどおり、総会前に幹事会を行った。この総会の開催案内は役員、学年幹事、支部の事務局長らに送られているようであるが、出席者は決して多いとは言えない状況であった。

角笛会事務局では、日頃の事務、会報の発行、会員名簿の発行準備など本来の教職以外になさっていることは、多忙を極めていると、いつも感謝しているわけである。と申すのは、小生が東京角笛会の事務局を前任の川口武志先生からバトンを受けて8年ほどになるのか。この間にあったさまざまなことを思えば、角笛会事務局のご苦勞が十分理解できるのである。事務局の業務は、やるべきことは絶対にやらなければならないのである。したがって能率的な業務処理は十分考慮しなければならないが、事務を貯めてしまわずに毎日、こつこつと処理する必要があると思ひ、微力ではあるが全力を尽くしている。

角笛会に対して小生が日頃、考えていることは年1回発行のこの会報の発行の時期を年度始めにすることである。年度始めに発行して、支部に発送し、支部からなるべく早く会員に届くようにすることが必要である。これにも

とづいて会員に会費を納めていただくように、働きかけるべきである。そして会報に総会開催案内、校友会関連記事を掲載してなるべく多くの会員が総会に出席できるよう仕向ける必要がある。また支部で会員に発送することを考慮して会報の用紙はなるべく薄い、軽量のものを望む。

会員名簿が平成10年発行以来、来年度に発行されるという。大事業である。前回の会員名簿を土台により良い名簿の完成を祈ってやまない。名簿はより正確さを要求される。この正確さを何に求めるかというと、住所、勤務先など変更した場合、本人の申告が大原則であるが、あまり実行されないのが現状である。そこで最も重要なことは卒業年ごとのクラス会の名簿である。したがってクラス幹事の責務が重いのである。見やすい総索引が望ましく、物故者一覧はそれぞれの卒業年の末尾に連記されれば見やすくなり、都道府県別の索引の必要性があるかないか検討を願いたい。

いずれにしても会員の愛校精神に頼ることになるが、役員諸兄の責務も重いと思う。角笛会のますますの発展と盛会を深く祈念する。

埼玉県支部

高橋 三男(昭和34年卒)

角笛会会員の皆様にはご健勝にてご活躍のことと拝察申し上げます。

また、諸先生方におかれましては角笛会会員として、それぞれのお立場から各方面におかれまして、多大のご貢献なされておられることと存じます。

私自身、地域にあって多くの角笛会会員の皆様を支えられて、社団法人埼玉県獣医師会会長として二期目を勤めさせていただいております。

活躍する卒業生

1

BSE騒動に遭遇して

秋山 雅彦

(神奈川県食肉衛生検査所, 昭和59年卒)

平成13年9月10日テレビ番組(何を見ていたかは忘れたが)の臨時ニュースを伝えるテロップに「千葉県で狂牛病の疑いのある牛を発見」との表示がでた。これがBSE騒動の始まりである。ニュースとしては翌日のアメリカテロ騒動に隠れてしまった感があったが、当該牛は英国獣医学研究所に送られ、9月21日にBSEと確定された。

厚生労働省は、食肉となる牛(当初は30か月以上の牛)のBSE検査実施に備え、10月2日から10月16日まで横浜検疫所でBSEスクリーニング検査の研修が実施され、全国の食肉衛生検査所から1~2名が参加した。研修は実際に牛の脳を検体として実施したので、偽陽性がでて新聞をにぎわしたりもした。

研修が終わってからは、10月18日からのBSEスクリーニング検査実施に向けての機器整備、消耗品購入、伝達研修等多忙な日々が待っていた。10月18日に開始できるのか不安のほうが多かった。

神奈川県食肉衛生検査所は全国食肉衛生検査所協議会の事務局を担当しており、厚生労働省から情報が入りやすいという立場にあったため、細胞破砕機等特殊で数が少ない機械の入手はスムーズに行えた(これは、のちのち神奈川は情報をほかの検査所へ流さなかったと一部から批判を受けたのだが。)

さて、10月18日当日。ほとんどすべてのテレビ局、新聞社が神奈川県食肉衛生検査所に集合した(公開する検査所が少なかったせいもあるが)。急きょ改造したBSE検査室の外側に、カメラと取材陣がならび、そのなかでBSEスクリーニング検査が始まった。当日は1頭ということもあり、もう一人研修を受けた検査員と二人で実施した。

研修を1回受けた後は、イメージトレーニングだけ(1キット25万円と高価なためデモで使うことができない)だったことから、非常に緊張しながらの検査であった。

結果は陰性であったが、非常に慌ただしい一日であった。検査中反応待機時間があり、その間に、撮影用に同じ操作をしてくれ等々の要求に答えたり、報道のために検査してるといふ文句を言いながらの検査であった(二人の会話は外には聞こえない。)

BSE検査体制としては、10月18日付けで3人の検査員の異動、衛生研究所から7人の兼務(1日の検査所勤務は最初4人であったが、炭疽騒動があり、11月から3人に

なった。)で人員を確保した。検査頭数も徐々に増え、11月には1日30頭~40頭になった。

神奈川県では、これまで4箇所あったと畜場を平成14年4月1日から1箇所に統合した。

これに伴い当検査所も再編整備を実施しており、検査員も60名(臨時任用職員14名)に増員した。衛生研究所の7人の兼務は3月末で終了し、4月からは新規で3名(臨時任用職員2名)が微生物検査班(BSEスクリーニング検査を担当)に配属され、新たに伝達講習を行うこととなった。新たな人員がBSEスクリーニング検査をマスターするまで、気が休まらない日々がしばらく続いた。

BSEスクリーニング検査については、午前と午後の二班に分かれることから、微生物検査班(6名)だけでは対応しきれないため、他の精密検査課員(病理検査班、理化学検査班、病畜検査班)に応援をもらいながら実施している。

このようにいろいろな人にBSEスクリーニング検査を新たに覚えてもらいながら、だれでも検査ができる体制づくりを進めている。

当検査所で検査している牛は廃用の乳牛の割合が多く、いつか陽性が出るのではないかと思っていたが、今年の8月21日、ついに陽性牛に遭遇した。これまでもスクリーニング検査が陽性で国立感染症研究所へ



確認検査のため検体を送ったことはあったが、今回はスクリーニング検査のOD値が非常に高く(陽性コントロールを遙かに超えていた。)、まず間違いなく陽性だろうというものだった。早速所内対策本部が設置され、施設設備の消毒、検体送付の準備等々夜中近くまで対応に追われた。

結果は、22日ウェルスタンブロット陽性、23日免疫組織染色陽性でBSEと確定された。

BSEについては、1986年イギリスで報告され、情報としては知っていたが、対岸の火事という意識があった。このため国の対応が遅れ、結果としてBSEの進入を防ぐことができなかったことは非常に残念なことではあったが、BSE検査の第一線にいるという貴重な経験もまたなかなかできないことではある。現在もスクリーニング検査に追われる日々が続いている(月に5~6回再検査があり、そのときは緊張がはしる。が)、食肉衛生検査所での検査はBSEだけではなく、その他の疾病の排除も行っており、農場から食卓まで安全で安心できる食肉の供給をめざして今後も努力していきたい。

くするためのものであるが、モンゴル人が幼い時からいかに乗馬に長けているかを示している。

ナーダムの競馬ではまずゴール地点に馬と馬の乗り手、馬主、飼主そして見物人が集まってくる。そこでは、馬の乗り手である子供達が馬を落ち着かせるために流れるような高めの旋律を得意に口ずさみながら、馬を歩き回らせている。その間に馬や乗り手にモンゴル名物の馬乳酒を与え優勝できるように祈っている。見物する人は、この間に勝ちそうな馬を予想するのである。

競馬を取り仕切る人の合図で、乗り手は、馬に乗ったままスタート地点まで移動していく。つまり、馬たちはスタート地点からゴールまでを往復するのである。往復が本番であるのだが、スタート地点までの往復も速足で、まるで競馬が始まっているかのように軽快に走っていることには驚いた。

参加する馬がスタート地点まで集まると、係りの人が合図して競馬が始まる。特に定められたスタートラインがあるわけでもなく、馬たちは常に動き回りながら何となく1つの集団になるとスタートすることである。見渡す限り草原の中、スタートした騎主と馬たちは、的確にゴール地点を目指し走り出すのである。子供達は馬に負担にならないように上手に馬を操りながらゴールを目指すのである。馬の横を走る車の運転手の話では、20km~30kmの速度だそうで、決して平坦ではない草原ではかなりの速さだと思う。

先頭の馬は、ゴールまでスピードを緩めることなく走り続けたことが伺える。ゴールでは、着順を書いた札を審判の人が馬に乗り選手の横を走りながら手渡していた。

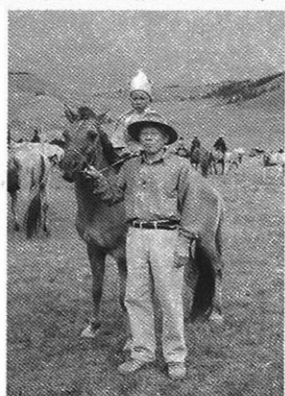
私がこれらの競馬を見ている時に何よりも強く感動したのは、参加している馬の運動能力の素晴らしいことである。レースの終了後、その馬たちの側に近寄ってもついつい5分ほど前まで何kmも走り続けてきた馬とは思えないほど落ち着いているのである。モンゴルの馬の運動能力の高さを見せつけられた。

私は今回モンゴルを旅して感激したことがいくつかあった。その一つが、入賞馬に賞品を渡したことである。私は、県馬術連盟が主催する協議会及び県内で行う中四国の馬術競技大会では大会長として表彰状を授与しているが、今回、果てしなく広がる大草原を何kmも走ってきた馬と騎主にねぎらいの言葉と賞品を渡す光栄ある役を果たすことができた。

人馬が一体となって大草原を疾走し30~40kmの長丁場で勝負を争うモンゴル競馬は、観客を興奮の坩堝に巻き込む魅力に溢れている。ナーダムの競馬を実地に見物し、また、テレビ、ビデオでご覧になった方にはなじみがあると思うが、ゴール直前の競合いで馬が全力を使い果たし絶命し、馬とともに倒れた子供の騎手が自らの怪我を顧みず愛馬の首筋に抱きついて号泣するシーンは同情心をそそると同時に感動的ですからあり、筆舌に尽くしがたいものがある。

何よりも厳しい自然の中で育ち、その素晴らしい能力と同じ位すてきな魅力を持っているモンゴルの馬たちに直接出会えて何日も乗馬したことが、モンゴル滞在のなかで喜びの一つであった。

モンゴルの文化や自然については別の機会に紹介することに致します。以上



活躍する卒業生

2

水族館での仕事

遠藤 智子

(しながわ水族館, 平成5年卒)

水族館に勤めていますという、「イルカの獣医さんですか」、といわれる事が多いのですが、実際には飼育係も兼務しながら水族館にいる生物全般の健康管理や治療を行っています。数グラムの小魚から、300kg以上ある大きなイルカまで、魚類、爬虫類(ウミガメなど)、鳥類(ペンギン、カモ類)、哺乳類(イルカ、アシカ、アザラシ)と体の構造も、機能も性質も違う様々な生き物を対象としているため、毎日が悪戦苦闘の連続です。水中の生物であるために、陸上動物とはまったく違った管理や処置が必要な生物が多く、それぞれの種類ごとにその生物にあわせた対応が必要です。また、獣医学的なデータが不足している生物が多いのが現状です。

例えばイルカの場合、水中生活に適応したために、水中から上げてしまうと、自重で臓器が圧迫され機能障害を起こしたり、皮膚が乾燥して火傷したような状態になってしまう厄介な動

物です。そのため、何か処置をする場合にはイルカ用の担架にのせ、呼吸孔から水が入って濡れない程度に水を張り、担架ごとイルカを水に浮かべた状態で取り扱います。また、処置に時間がかかる場合には皮膚が乾燥しないように、ワセリンや亜鉛華軟膏で空中に露出している部分をすべてカバーし、さらに、体温が上がらないように水を絶えずかけます。採血に関しても、他の動物とは少し違って、イルカの場合通常尾鰭から採血を行います。体温を維持するための構造として、動脈の周囲を複数の静脈が花びら状に取り囲むように走行し熱の受け渡しを行っているため、動脈血が混ざらないように静脈血のみを採血するよう注意が必要であったり、血管の走行が見えれば見えるほど血流が少なくくぼんでいる状態で採血しづらいなど、採血という基本的な作業でも、慣れるまで少してこずりました。また、採血ができ、血液検査の結果がでて、はたしてそれは正常なのか、異常なのか。診断基準となるデータが少なく、はじめはしながわ水族館での正常値づくりからスタートしました。最近ではメディカルトレーニングという方法を用い、イルカにも協力してもらって、採血を簡単に行うことができるようになりました。このトレーニングは、ショーのジャン

プや握手などの種目をイルカに教えるのと同じように採血や体温測定を行う際、イルカ



に検査を行える姿勢をとらせ、検査ができるようにした種目です。イルカの健康管理は体重測定をはじめ採血、体温測定などほとんどがこの方法を用いて行うことができるようになります。捕獲や保定などによるイルカへの負担をほとんどかけずに検査を実施できるようになりました。水族館での獣医師の最も重要な役割は病気を起こさせないように管理することですが、そのためにメディカルトレーニングはとても役立っています。

水族館にはイルカだけでなく、貴重な生物がたくさん飼育されています。魚類の治療もたずさわってみると奥が深く興味深い分野です。現在水族館で働いている獣医師は全国で約30名ほどしかいませんが、獣医学的にはこれから発展して行く分野だと思います。たずさわる人が少しずつでも増えてくれるといいなと思います。

3

ペットの放逐に歯止めを・・・
生態系保全の立場から

牧野 敬

(神奈川県自然環境保護センター, 平成5年卒)

神奈川県自然環境保全センターでは昭和53年から怪我をした野生動物の保護、治療を行い自然に還す仕事を行っています(昨年度は844種889件の受け入れがありました)。

野生動物が普段私達が診療の対象とすることの多いコンパニオンアニマルや産業動物と大きく異なるのは人間に管理されていない動物が対象であり、生き長らえるのが当たり前の動物とは事情が異なると言う事です(他の生物に捕まると言う事=食べられてしまう事)。

そのため、野生動物の治療には家畜や小動物とは異



なる以下のような問題点があります。

- 1) 重症の動物が持ち込まれるケースが多い。
- 2) 人間に保護され、治療される事自体がストレスになってしまう。
- 3) 一命は取りとめても放逐出来ない個体をどう取り扱えば良いのか。

これらの理由から、折角センターに保護されて来た動物達も4割程度しか自然に戻す事が出来ない状況になっております(死亡してしまった個体についても博物館や研究機関に提供することで未だに解明されていない生態の解明に役立てて頂いています)。

実際に野生動物の治療に関わってみると、保護されて来る動物達を自然に還すことよりも、保護されなくても済むような環境を整えて行く事が大変重要である事に気がつきます。

最近、県内で移入動物であるアライグマの有害駆除による捕獲頭数が急増しています。

当センターでも13年度、傷病鳥獣として生体で保護された哺乳動物が104頭だったのに対し、市町村で処分し切れずに搬入さ

れて来たアライグマは224頭でした。

私達人間も含めて全ての生き物は他の生き物の命を奪うことでしか生きて行くことは出来ません、アライグマに罪は有りませんが、増えつづける彼らによってこれ以上生態系が破壊される事は防がなければなりませんし、人間が引き起こした問題である以上、私達を取り組んで行かなければならない問題であると思います。

もしも、最初に放逐された個体が不妊手術を施されていたり、最後まで適正に飼育されていれば、誰も死なずにすんだ事でしょう、“罪の無い動物達の命を奪わなければならなくなるような事態を引き起こすのはもうやめましよう。動物は最後まで面倒を見るべきだし、どうしても飼えなくなった時には自分で安楽死させるくらいの覚悟を持って飼って欲しい”。飼主さんへの管理責任の普及啓発と言う点で、獣医師にも自然環境保全のための大きな役割があるように思います。

日本は島国であることや、明治時代まで鎖国政策が取られていたこともあって世界中で日本だけにしかない貴重な生き物が大変多い国です。

このような多種多様な生き物達が住める環境をいつまでも残して行きたいものです。

学会関連記事

第40回日本大学獣医学会(日本大学担当)が下記のように開催されました。

担当学会長 鳥海 弘

事務局 丸山総一

日時:平成14年8月31日(土); 10:00~

場所:日本大学生物資源科学部湘南校舎

教育講演

1) 酒井 健夫 先生

(日本大学生物資源科学部教授)

「牛海綿状脳症(BSE)の解決へ向けて」

座長:佐藤常男 先生(日本大学・獣医病理)

2) 宮本 賢治 先生

(エンジェル動物病院院長)

「犬猫の慢性腎疾患に対する

臨床的アプローチ」

座長:亘 敏広 先生

(日本大学・総合臨床獣医)

一般口演

臨床部会 9題

基礎・応用部会 6題

編集後記

毎年思うことですが、残忍な事件や心ない事件が新聞をにぎわすことが多くなってきているように思えます。地球の温暖化が進んでいると言われているようですが、人の心は寒冷化が進んでいるようです。

2002年12月12日(丸山総一昭和57年学部卒)